

2021. 6. 17 (木)

明日のことは明日が思い煩う

宮原 浩二郎

だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。（マタイによる福音書 6章 34節）

はじめに

このチャペル・ルームは本当に久しぶりなのですけれども、懐かしいような感じがします。これを設計する時にいろいろと打樋先生も苦勞されたのを思い出しました。久しぶりに壇上に立って、すごく懐かしい感じがしています。

きょうは「日常と非日常」というテーマなんですけれども、今ベネディクト先生から聖書の言葉を読んでもらいました。「明日のことは明日が思い煩う」という有名な部分で、これはすごくいい言葉ですよ。その前に、確か、「空を飛ぶ鳥を見なさい」という言葉があります。空を飛ぶ鳥は明日何を食ぶようか、あるいは何を着ていこうかなどと全然心配することなく、のびのびと自由に空を飛んでいる。「神様はすべて見てくださる」というお話があって、すごく伸びやかな、とても好きな言葉です。

現代の生活では、とくに今はコロナの関係もあります。明日のことは明日が思い煩う」というのは、日常的というよりも非日常的ですよ。われわれは日常的にはむしろ常

に明日のことをいつも煩っていて、明日は何をしなければと時間に追われ、心配しています。将来のことを計画したり準備したりしているのが当たり前の日常になっていて、特にこの10年、20年ぐらひはますますそのような傾向が高まってきたように思います。

将来計画の過剰さ

皆さんはPDCAサイクルという言葉を知っていますか。聞いたことがある人もいるのではないかと思います。プラン、ドゥー、チェック、アクションの略語で、いろいろな物事を計画し、実行し、評価し、それからさらに改善してというサイクルを回していくということです。これは企業の品質管理から始まったのですが、そのような考え方がかなり広く取り入れられてきて、われわれはいつも将来の計画をしているわけです。計画して前に進めて回していくというサイクルをやろうということで、関学などの大学も取り入れています。それがどんどん個人の生活にも入ってきて、個々人もいわば企業のような形で常に計画して、今現在というものを常に将来

との関係で位置付けていかなければいけないと、確かに必要なことではあるのですが、すごくそのような傾向が強くなってきているのです。

皆さんも知っているように、その背景には世界的な経済競争や発展競争のようなものがあります。グローバルな競争があって、きちんと計画的にやっていかないと負けてしまうというわけです。だから皆さんの学生生活なども、古い話で申し訳ないですけども、20年、30年ぐらい前と比べるとかなり忙しくなっているような気がします。常に成績のこと、それから就職のことなどを考えて、計画的に勉強し、活動していかなくてはいけないということですね。現在をいつも将来との関係でチェックしていかなければいけない雰囲気が強くなっています。

発展至上主義とコロナ禍

今のコロナ禍の背景にも多分同じようなことがあって、非常にざっくりした言い方になりますが、社会全体をどんどん発展させる、成長させるといことがこの二、三百年の間続いてきています。経済競争でも、常に競争によって発展させる、成長させる、拡大させるという傾向があって、そういう発展至上主義が背景になってコロナ禍も出てきたのではないかと指摘があるのですが、僕もそうだと思うのです。

今度のコロナウイルスがどこから出てきたかなど、いろいろな調査や研究がもちろんこれからもあるでしょう。それでも大きな根本的な背景としては、やはり地球温暖化、それから熱帯雨林の縮小、地球の生態系の破壊があることは、皆さんも聞いたことがあるでし

よう。今まで人間が出会わなかった野生動物と接触してウイルスが持ち込まれるということです。他方で、人間社会のほうは人口が増加して、都市がどんどん過密になって、それから、ものすごい勢いで世界中を移動するわけです。だからパンデミックといわれるように、世界で同時にものすごい勢いでウイルス感染が広がっていきます。その背景にやはり経済競争による地球環境の過剰な開発というものが根本的なところにあるわけです。

このことは去年のコロナ禍が始まった時、もう一年前になるのですが、長崎大学の熱帯医学研究所の山本太郎先生が、医学者ですけども、大きな観点から指摘しています。コロナ禍の根本的な原因として近代社会の発展至上主義があると考えていて、彼の言葉を引用しますね。「個人的には発展を至上とした価値観というのは変わる時期に来ていたのかなという気がしています。必ずしも発展ということではなくて、環境の中において、われわれは変わりながら、常にそこに適応するというか、その中で生きていく、生き方を模索する、経済的な拡大とは違う価値観であるべきなのだろうという気がしています」ということです。

そんなに強く断定しているわけではないのですが、わかりやすく落ち着いた口調で話しているので、かえって説得力を感じます。だから、発展を至上とした経済的な拡大という価値観が問題で、それは競争を常に伴っているわけですけども、そのようなものではないところに、そろそろ切り替えていかなくてはいけないのではないかなというお話で、僕もあらためてそのようなことを考えさせられています。

足下にある大切なもの

今のコロナ禍では皆さんも、年齢などによって多少は条件が違うとはいえ、みんながずっと苦しめられているわけです。多くの犠牲者を出していますし、それから経済的な困窮などの問題も深刻です。ただ、それと同時に、教訓というか、少し立ち止まるということは立ち止まって日々の生活の足下を見直すというか、そのような機会でもあったように思います。少し立ち止まって、先ほど言ったような、常に先を見越して活動する、競争するのを一度やめてみるという機会でもあって、ある種スローダウンというか、そのような機会でもあるように思うのです。

ステイホームということもあって、一度立ち止まってスローダウンして、皆さんもそうかもしれないけれども、家の近くを散歩したりするでしょう。僕などもよく散歩するようになったのですが、ありがたいことに、以前と比べて散歩している人が多いので、不審者扱いされなくなったというのは嬉しいことです。余裕を持って散歩できるというか、用もなく歩いているということが肯定されているという意味では、ちょっと良い面というものもあるのではないかなと思っています。

それで、今まで見過ごしてきたいろいろなもの、足下にある大切なものが見えてきます。例えば、いつ来ても誰もいない公園があって、以前は無駄かなと思っていたのですが、最近ではいかに公園がありがたいか、またところどころに空き地があるということがいかに大切かということがよく分かりました。ちょっとした路地などで花や木など、今まで目に入らなかつたものがあらためて目に入ってくるということがあります。あるいは

は、これは住宅地の場合ですけれども、ごみの収集車がすごく目につくようになりました。ごみを集める作業をしている人たちがいるでしょう。声を出さずに手分けして、とても手際よく作業してますよね。まさにエッセンシャルワーカーの大切さがよく分かるのですが、そうした仕事の有難さをあらためて肌で感じることもできる。

貴重な余白の時間

特に将来のために何かをしているというのではない余白の時間というか、足下にある生活をあじわう時間というのがすごく大事なということを感じています。少しエゴを緩めるとするか、将来の計画などあまり心配をしないで今現在を楽しむという、あるいは自分の身の回りにある生活空間をゆっくり感じ取るような、身構えをゆるめる時間というか、その大切さが分かるような気がするのです。始めにお話したことに戻れば、たしかにPDCAのような、常に将来を先取りする身構えは今の社会で生きていく以上は必要なのですが、それでもそこからふっと外れる時間、ゆるめる時間というものもまた、とても大事なだと思います。

このチャペルの時間というものもある意味では貴重な余白の時間です。別に成績を良くするためでもないし、いい就職のためでもなくて、まさにこの静かな時間でPDCAのようなものと関係なく、明日の心配をせずに自分を振り返ったり、それから神様に祈ったりする、そのような貴重な時間です。コロナ禍のなかで、このような時間があるということが、とても大事なことなのだなということが分かってきたような気がしています。

関学のチェペルの時間も、現代の社会からしたら非日常の時間で、しかも、とても貴重な非日常の時間なのではないかなと気づかされて、今日は久しぶりにそのようなことを考

えながらやって来ました。ということで、そろそろ時間ですので、これでお話は終わりにしたいと思います。

(社会学部教授)